

高知城跡(高知市)

築城年代: 1603年(慶長8年)、築城者: 山内一豊

ここは追手筋/大きな石を積んだ石垣で枡形を構成し、内部が見通せないように追手門が右側に建てられた城の正面/追手門の上に天守が見える



右手を見ると「追手筋」という文字が/その右手には山内一豊像が立つ



とと

縄張図/築城の総奉行の百々越前安行が息子の百々出雲直安とともに地形を考慮して建物の配置や石垣、堀などの構成を計画・設計した



左手を見ると水堀/この先で右手に折れている



振り返ると土佐藩家老の野中兼山邸跡と記された標柱が立っている



これが追手門/重層で入母屋造り、その木割りは太く堂々とし、檜を用いた主柱や扉、冠木などには要所に銅製の飾り金具を取り付けている/その規模が大きく、城門としては豪壮優美な趣を備えている



左手を見ると「国寶 高知城」と記された標柱と説明板がある



追手門



追手門

慶長年間創建、寛文4年(1664)に再建されたもので、当城では新しく大きな石を積みだ石垣で折形を構築し、内部が見通せないように石側に建てられた城の正面である。

重層で入母屋造り、その木割りは太く堂々とし、檜を用いた主柱や扉、杉木などには要所に割製の飾り金具を取付けている。その規模が大きく、城門として豪壮美な姿を備えている。

Ōtemon (Main Gate)

This is the main gate of Kuchi Castle, originally built around 1610 and rebuilt in 1664. The ground in front of the gate and the adjoining ramparts make up a bow-shaped defence, or *masugata*, a square of defensive wall with loopholes, to attack invaders from three different directions. The stones used in these ramparts are exceptionally large for this castle. The gate was positioned so that the enemy could not see into the castle grounds.

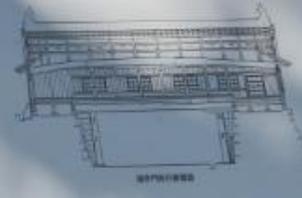
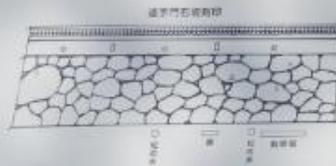
The gate has two floors and half-hipped gables. The timber pillars and beams used in its construction are particularly large and the layout of them is very grand. The main pillars, doors and lintel, which are made from *asakava*, are reinforced and protected with decorative cooper plates. It is a large-scale gate, which looks magnificent as well as graceful.

追手門

江戸(加藤守)1601年創建、寛文4年(1664)再建。江戸時代初期に城の石垣と共に、城の防禦を強化する為城の正面に、弓形に木割折形の主柱と檜木が用いられ、要所に割製の飾り金具が取り付けられた。追手門は雄壮美な姿を備えている。

오래문

1601년 이후 창건, 1664년 재건되었다. 큰 목재 방한 벽에 맞추어, 직물 안으로 처음 맞아 세운 수·입으로 세워진 성곽 형식이다. 특히의 목재를 사용한 기둥과 거문과 같은 장식이며, 석기 문에 놓여진 많은 장식적용 물의 장엄으로서의 웅장하고 화려한 성을 보여준다.

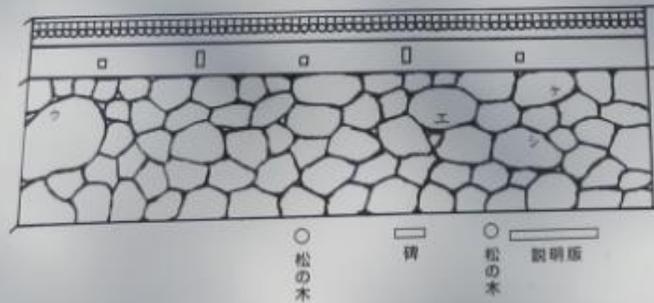


追手門

慶長年間創建、寛文4年(1664)に再建されたもので、当城では珍しく大きな石を積んだ石垣で枡形を構成し、内部が見通せないように右側に建てられた城の正面である。

重層で入母屋造り、その木割りは太く堂々とし、櫓を用いた主柱や扉、冠木などには要所に銅製の飾り金具を取付けている。その規模が大きく、城門として豪壮優美な趣を備えている。

追手門石垣刻印



正面の石に「エ」と刻まれている



こちらは「シ」と「ケ」



追手門から城内を見たところ



右手を見たところ



左手を見たところ



追手門を潜って西方向を見たところ/天守が見える/その手前下に銅像が立っている



これは板垣退助銅像



板垣退助



板垣退助 (1837-1919)

近代日本の道を開いた自由民権運動の最高指導者として有名。天保8年(1837)4月17日、高知城下中筋町の上士の家に生まれ、旧姓は奥、無形と称した。針幕運動に参加、戊辰戦役の終に先祖の板垣姓を治承り、武断を立てた。

維新後、新政府の夢儀に刺したがやがて下野。明治7年(1874)1月、民権黨時設立建言書を左院に提出したのを導高。同年4月、高知独立同志会を創立して自由民権論を述べた。明治14年(1881)10月、自由党結成に推され、翌春、東海道を遊覧の途上、4月8日健康中病院で暴漢に刺された。血闘に染まりながら板垣の叫んだことばは、いっしょか「板垣死すとも自由は死せず」の美文句となり、怒濤の如く全国に伝承され自由を求めて闘う人々を大いに勇気づけた。明治20年(1887)5月、捕鯊を捏られたが一代車旗錦を名え、一代旗手で揮發した。以後、内閣大臣に任ぜられること2回、晩年は政界を離脱し、社会改良運動に専念した。相撲や格闘道などの発展のためにも尽力したが、大正8年(1919)7月16日、83才で死去した。遺著に「一代車旗錦」・「武士道」・「茶と人道」・「癸卯7年」・「立憲の大本」等がある。

ITAGAKI TAISUKE

Itagaki Taisuke is famous for his leadership of the Popular Rights Movement in the late 19th century. He was born in Nakamura-cho, Kochi, into an upper middle-class family. His original family name was Inui, and his birth name was Mukai. At the end of the Edo Period (1603-1868), Itagaki participated in the movement to throw down the Tokugawa shogunate. During the Boshu War (1868), he reunited his name from Inui to Itagaki and became recognized for his services as a soldier.

After the overthrow of the Tokugawas, he became a head councilor in the newly established Meiji government. However, when a debate over an overseas policy he returned to Kochi and formed the Public Party of Patriots, which objected to the government's subsequent foreign military aid for the establishment of representative government in January 1883. In April of the same year, Itagaki organized the Rikugun Seisaku-sha Society, which promoted ideas of freedom and popular rights. The group coalesced into a political movement, and in 1881 Itagaki helped form and was named head of the Jiyu-to (Liberty Party), Japan's first genuine political party. In the following spring on the 6th of April he was attacked by a man with a knife. His clothes stained in his own blood, he cried out:

"Itagaki may die, but liberty never!"

This phrase became instantly famous and inspired people all over Japan in their search for political freedom.

In May of 1887 he was given the aristocratic title, *kyoujintoku*, but he argued for making such honors non-hereditary. In later years he was named Home Minister twice. In 1890 he received merit political title, and then he worked for social improvement movements and for the development of traditional Japanese sports like *Sumo*, *Judo*, etc.

He died at the age of 83 on July 16, 1919. Among his works are *Bushido* and *Reikoku no Taikan* ("The Philosopher at the Basis of the Nation").

板垣退助 (1837-1919)

板垣退助は、幕末の自由民権運動の最高指導者として有名。天保8年(1837)4月17日、高知城下中筋町の上士の家に生まれ、旧姓は奥、無形と称した。針幕運動に参加、戊辰戦役の終に先祖の板垣姓を治承り、武断を立てた。

이타카키 다이스케 (1837~1919)

이타카키 다이스케는 19세기 말 자유민권운동의 최고 지도자로서, 1868년 메이지 유신을 이끈 데에 공헌했다. 1881년 '자유당'을 창당하고, 1887년 '국민당'을 창당했다. 1890년 내각총리 겸 내무부 장관으로 임명되었다. 1890년 메이지 유신을 이끈 데에 공헌했다. 1890년 메이지 유신을 이끈 데에 공헌했다. 1890년 메이지 유신을 이끈 데에 공헌했다.



城内側から見た追手門



少し退いて見たところ



右手に石垣に登る階段が設けられている



さて、三の丸下の杉の段へと進もう



右手に登って行く/前方に三の丸の石垣が見える



三の丸の石垣をアップで見たところ



左手の石垣を見ると突起物がある



アップで見たところ



石樋（いしどい）

高知県は全国でも有数の多雨地帯のため、高知城も特に排水には注意が払われている。

石樋は、排水が直接石垣に当たらないように石垣の上部から突き出して造られており、その下には水受けの敷石をして地面を保護している。

このような設備は雨の多い土佐ならではの独特の設備で、他の城郭では見ることのできない珍しいものである。

石樋は本丸や三ノ丸などを含め現在16ヶ所確認されているが、下になるほど排水量が多くなるため、この石樋が一番大きく造られている。



さて、正面は杉の段から見た三の丸の石垣



こんな塩梅/石垣は折れを持って横矢が掛かっている



あのう
近江穴太(滋賀県)出身の北川豊後定信が石垣工事の指揮を執った

三ノ丸石垣

三ノ丸は、慶長6年(1601)の築城開始から10年を要して最後に完成した。面積は4,641㎡、出隅部分の石垣の高さは約13m。

石垣に使用されている石材は主にチャートであるが、砂岩、石灰岩も一部使用されており、穴太衆(あのうしゅう)が、安土城の石垣で始めたとされる自然石の形を活かした野面積みで多くの面が構築されている。また、三ノ丸には、1,815㎡の壮大な御殿が建築されていた。

三ノ丸の入り口に

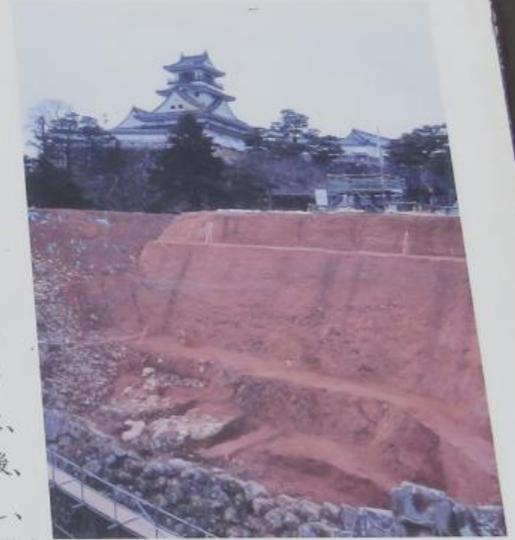
あたる鉄門付近の石垣は、鉄門の改築に伴い積み直されたものと見られ、砂岩で構成された打ち込みハギで築かれている。今回の解体修理に伴う発掘調査でチャートの根石(基礎石)が確認され、改めてその



石垣解体前の三ノ丸石垣は、孕みや隅角部の築石にヒビ割れがはいる

事実が確認された。三ノ丸の石垣は、慶安3年(1650)、宝永4年(1707)に地震や豪雨により、崩壊し、修理した記録が見られる。今回の修理は、平成11年に実施した調査により、割れたり、孕んだ石が多く、崩落の危険性が確認されたことから、平成12年度から事前の発掘調査や測量などを実施した後、鉄門付近から東面の花壇前まで実施した。工事は、改修前の石垣の状態を把握した後、割れた石以外は元の石を使用し、元の場所に戻すことなど原状復旧を基本として実施した。

改修工事は、穴太衆の野面積みの技法を現代に伝える石工が携わって平成16年度から平成21年度にかけて実施、総工費約4億円を要した。



石垣の裏ゴメや盛土の様子をみることができる

そこから見た天守/こちらへ進むと鉄門から三の丸へと至るが、後程行ってみよう



振り返ると山内一豊の妻、千代の銅像が立っている



山内一豊の妻の銅像

山内一豊の妻は、弘治3年(1557)生まれ。通称千代といわれているが、これを裏づけるたしかな資料はない。出身についても通説では近江国(滋賀県)浅井氏の家臣若宮友興の娘とされているが、近年では美濃国(岐阜県)八幡城主遠藤氏の娘ともいわれている。

幼い頃父を失い、178歳の頃一豊と結婚、貧しい暮らしの中で家を守り、戦いに明け暮れる一豊の出世を助けた逸話が残されている。中でも結婚の時持参した10両の金を出して一豊に名馬を買わせ、それが織田信長の目にとまって出世の糸口になった逸話は広く知られている。

また、関ヶ原の戦いの前に、笠の緒に縫りこめた手紙で関東にいる一豊に大阪方の情報を知らせ、その進路を決定づけさせたことが一豊の土佐一國領主への道を開くことになった。手芸や文筆にもすぐれ、賢夫人として知られている。元和3年(1617)12月4日、京都で没、61歳。法号見性院。

この銅像は昭和40年(1965)2月26日に除幕された。

The Bronze Statue of Chiyo, Katsutoyo's Wife

Katsutoyo's wife, commonly known as Chiyo, was born in 1557. It was generally thought that she was the daughter of Wakamiya Tomooki, one of the retainers of the Asai family in Omi(now Shiga pref.). In recent years, however, it has been suggested that she was a daughter of the Endō family, the head of which was the Lord of Hachimam Castle in Mino(now Gifu pref.).

Having lost her father when young, Chiyo married Katsutoyo at the age of 17 or 18. In those days, her husband spent much of his time at war. While he was away, she managed the household well despite being impoverished, and being a devoted wife, she provided much support for her husband. The most famous of anecdotes about her is that she offered Katsutoyo her dowry, 10 ryo, now ¥1,500,000, to buy a horse which greatly impressed Oda Nobunaga, the most powerful general in Japan. Thereafter, Katsutoyo enjoyed many successes.

Before the Battle of Sekigahara, Chiyo sent a letter twisted into the chinstrap of a messenger's hat to Katsutoyo who was in the Kantō area. In the letter, she gave him intelligence about Toyotomi's forces, and suggested his changing sides. As a result, he ended up on the winning side, and was rewarded with the lordship of Tosa.

Chiyo was also good at calligraphy and handicraft. Even today, she is generally respected as a wise wife. She died in Kyoto on 4 December 1617, at the age of 61. Her Buddhist name was Kenshōin. The unveiling ceremony of this statue was on 26 February 1965.

山内一丰妻子的铜像

山内一丰的妻子生于1557年。她17、18岁时嫁给了山内一丰。民间流传着很多关于她如何在贫困的生活中照顾着家庭。以及如何帮助整天忙于战争的山内一丰走向成功的逸闻趣事。其中关于她结婚时，拿出自己的私房钱为山内一丰购买名马的故事更是广为流传。正是这匹马。成就了山内一丰后来的飞黄腾达。这便是塑山内一丰妻子铜像的初衷。

除此以外，她还擅长女红、文笔又好，是个名副其实的贤内助。

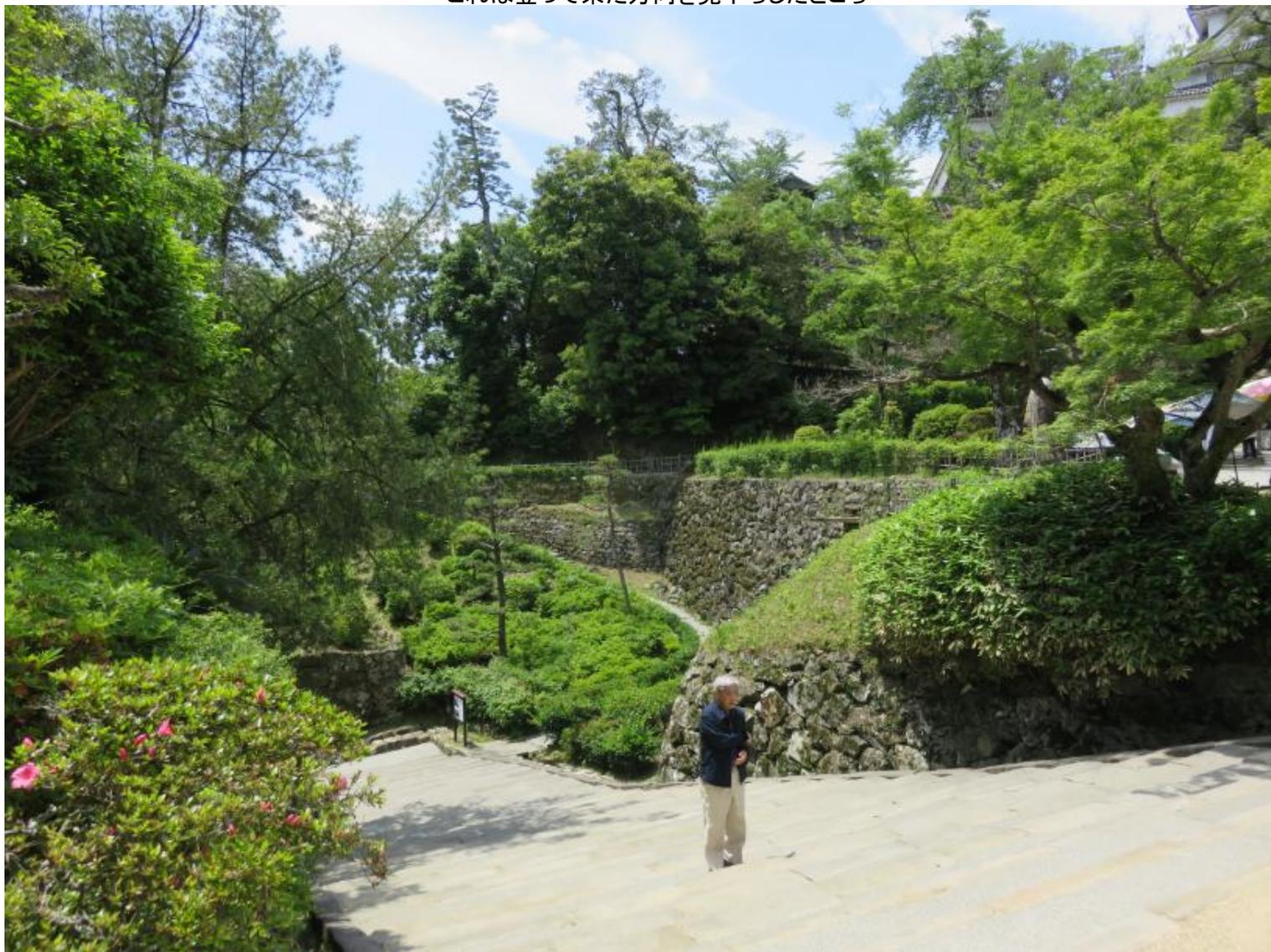
아마우치 가즈토요 부인의 동상

아마우치 가즈토요의 부인은 1557년 출생하여 17·8세 무렵에 가즈토요와 결혼하여 가난한 생활 속에서도 가정을 지키고 전투로 세월을 보내는 가즈토요의 출세를 도왔다 많은 일화가 남아 있다. 그 중에서도 혼인 시 지참했 소중한 돈을 들여 가즈토요에게 명마를 사게 하였는 이것이 가즈토요의 출세의 계기가 되었다는 일화는 널리 알려져 있으며 이 동상의 모티브가 되기도 하였다.

수예와 문필에도 뛰어난 재능을 보여 현처로 알려져 있다. 1617년 12월 4일 61세의 나이로 교토에서 사망하였다. 동상은 1965년 2월 26일에 제막식이 있었다.



これは登って来た方向を見下ろしたところ



次は杉の段を北方向に進み、証文倉庫の辺りから階段を登って三の丸へと進もう



石垣構築技術 Stone wall construction

石垣の積み方には3種類(野面積み・打込ハギ・切込ハギ)があり、高知城の石垣の多くは野面積みが採用されている。野面積みは自然石を積み上げたもので、一見すると乱雑な積み方であるが、奥行きのある石を積み、隙間に小石を詰め込んであり、非常に堅固であると同時に、排水の面でも優れている。降雨量の多い土地には排水を考慮した石垣が必要不可欠であり、高知の気候風土に最も適した手法である。

また、三ノ丸の北面には「扇の勾配」と呼ばれる美しい曲線を描く石垣がある。ここでは打込ハギの積み方が見られる。

ここは丑寅櫓下/ここから左手(西方向)に回り込んでいる



こんな塩梅/石垣は折れを持って横矢が掛かっている



その先もこんな塩梅/石垣に使用されている石柱は主にチャートであるが、砂岩、石灰岩も一部使用されており、穴太衆が安土城の石垣で始めたとされる自然石の形を活かした野面積みで多くの面が構築されている



その野面積みの石垣を見たところ



更に西方向に進もう/前方にも横矢掛りがある



左手に登る階段がある/右下は証文倉跡の辺り



丑寅櫓下を右手から回り込んでくると証文倉跡がある



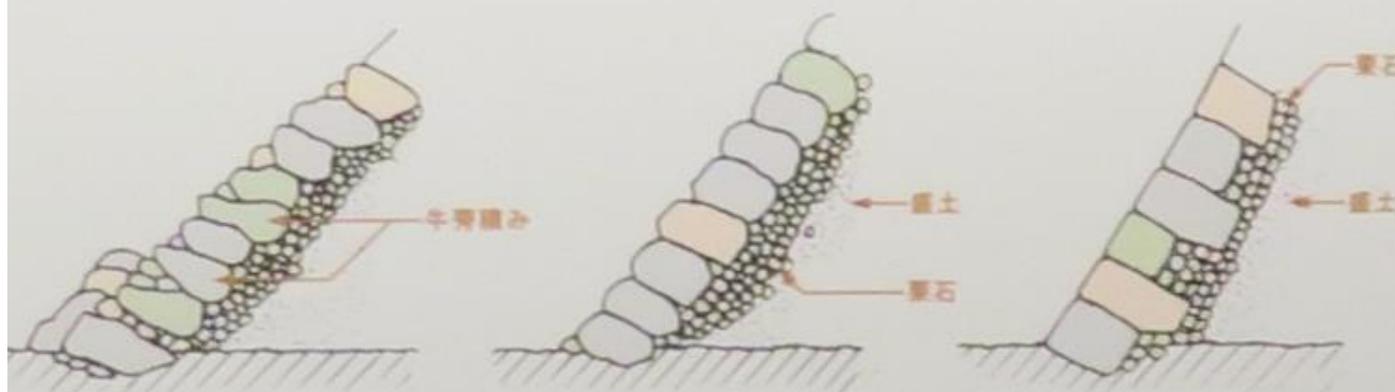
そのまま真っすぐ西方向に行く道は立入禁止になっている/こちらに行くと乾櫓跡に至るようだ



階段を登った先は右手に折れている/左手の石垣は「扇の勾配」で、打込ハギとなっている



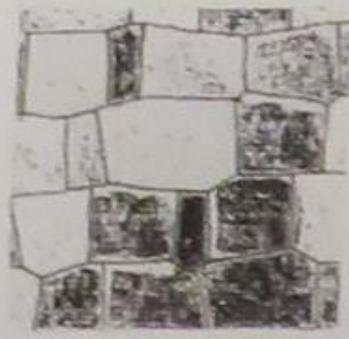
石垣の種類 加工と積み方



のつら
野面積み



うちこみ
打込八ギ



きりこみ
切込八ギ

階段を登って右手に進む



その先も立入禁止になっており、左手に階段がある



ここが鎌倉門跡であろうか/正面は二の丸の石垣



いぬい

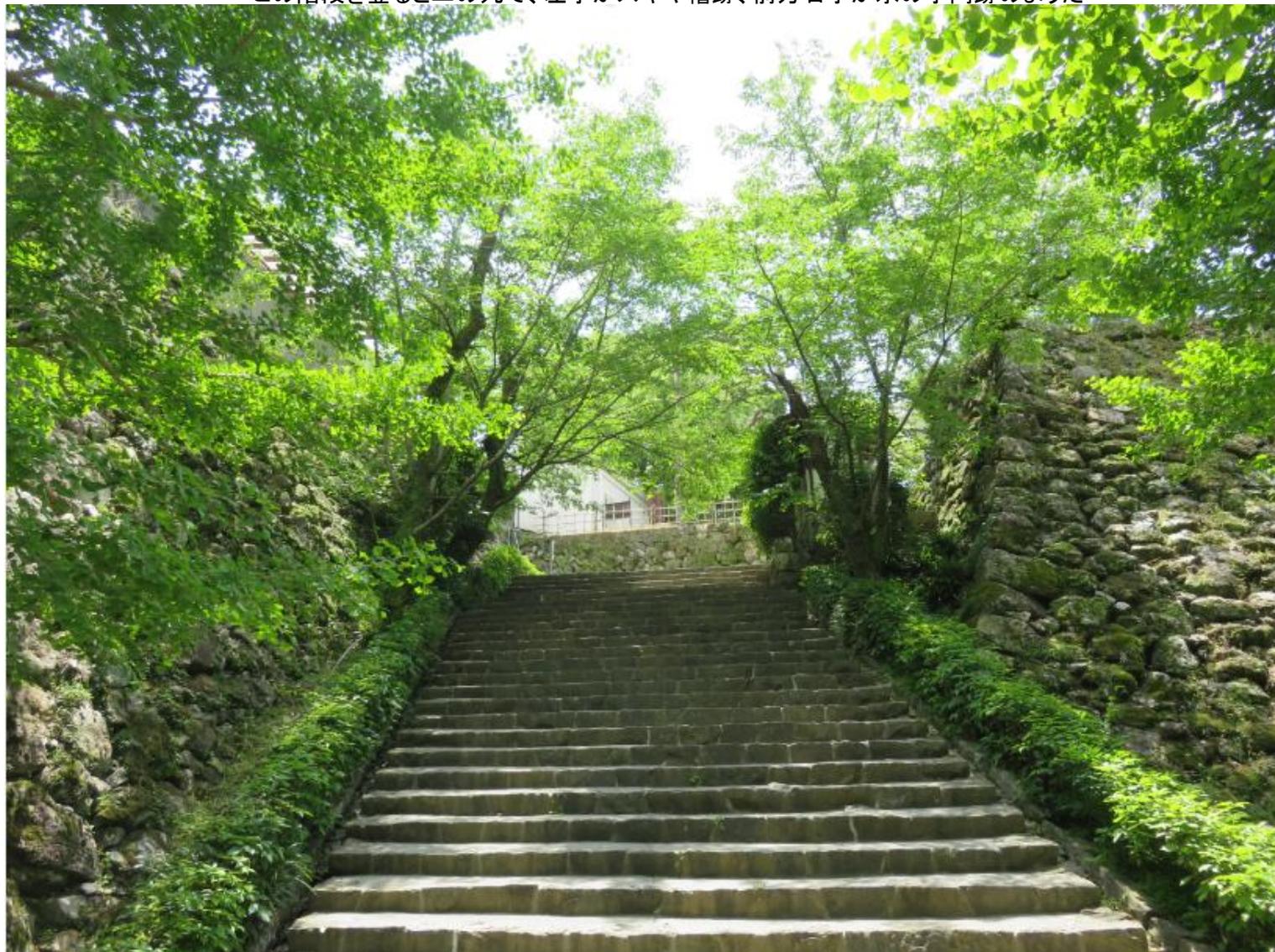
階段を登って右手を見たところ/こちらに行くと二の丸をぐるりと回り込む



振り返って左手を見たところ/少し先に右手に登る階段が見える



この階段を登ると二の丸で、左手がスキヤ櫓跡、前方右手が水の手門跡のようだ



階段を登らず、そのまま左手を進むと広い平場がある



ここが三の丸/往時は、曲折の多い石垣の上には沢山の狭間を設けた矢狭間塀がめぐらされ、東北角には丑寅櫓があったと云う
/北側から南方向に見たところ



その三の丸南側から本丸の天守を見たところ



アップで見たところ



三ノ丸



三ノ丸

高知城で一番広い平場で、外周 504 メートル、南北 85 メートル、東西 54 メートル、総面積は 4,641 平方メートルある。往事は、曲折不まい石垣の上には沢山の銃眼(銃筒)を設けた矢張り壁がめぐらされ、東北角には耳長櫓があった。

また、大書院と呼ばれる広大な建物が建設され、総面積は 1,815 平方メートルもあった。この建物は、主として年頭の礼式や五月節句その他の儀式などで大勢の藩士が参集するとき使われたという。この大書院は明治維新のち高知藩の執政府となり、次いで藩知事府から藩庁と改称された。明治 3 年(1870)藩庁は城西の致道館跡に移転した。明治 6 年、公園化に伴いすべての建物が取り壊された。現在は、入り口に当たる部分に門柱の礎てられていた礎石だけが残されている。

公園整備により多量の桜の木が植樹され、高知の桜の開花を告げる「ソメイヨシノ」の標本木があり、花見の場所として多くの市民に親しまれている。

Sannomaru (Third Citadel)

The third citadel is the largest terrace in the castle. The total area is 4,641m², and the circumference is 504m. It stretches 85m from north to south, and 54m from east to west. It was once surrounded by winding defensive walls with many holes to fire guns from, and a watch tower in the south-east corner.

There used to be a large building here, with a floor space of 1,815m², which was reportedly used for new year events and other rituals, or whenever a large number of retainers were assembled. The building was also used as the administrative quarter of Kochi province during the Meiji Restoration, and then it came to be called the Kochi provincial office. In 1870, the office was moved to the site of Chūōkan, a domain school, which was located to the west of the castle. Later, in 1873, when Kochi Castle was changed into a public park, all the structures here were destroyed. Nothing remains now but the cornerstones of the gateposts at the entrance.

Today, there are a lot of cherry trees here, which Kochi people enjoy in the cherry blossom season. Of those trees, the most important is called the "Yoshino" Cherry tree, by which the Meteorological Agency predicts the start of the cherry blossom season in Kochi.

高知城三ノ丸遺跡の位置



(高知城三ノ丸遺跡の位置) (2018年現在)

三ノ丸

高知城で一番広い平面で、外周 504 メートル、南北 85 メートル、東西 54 メートル、総面積は 4,641 平方メートルある。住事は、曲折の多い石垣の上には沢山の銃眼(狭間)を設けた矢挟間塀がめぐらされ、東北角には丑寅櫓があった。

また、大書院と呼ばれる広大な建物が建設され、総面積は 1,815 平方メートルもあった。この建物は、主として年頭の礼式や五月節句その他の儀式などで大勢の藩士が参集するとき使われたという。この大書院は明治維新ののち高知藩の執政府となり、次いで藩知事府から藩庁と改称された。明治 3 年(1870)藩庁は城西の致道館跡に移転した。明治 6 年、公園化に伴いすべての建物が取り壊された。現在は、入り口に当たる部分に門柱の建てられていた礎石だけが残されている。

公園整備により多数の桜の木が植樹され、高知の桜の開花を告げる「ソメイヨシノ」の標本木があり、花見の場所として多くの市民に親しまれている。

高知城三ノ丸御殿見取り図



(原図 安芸市立歴史民俗資料館蔵「三ノ丸絵図」)

入口に当たる部分に大書院の門柱の建てられていた礎石だけが残されている/前方は二の丸の石垣



振り返って東方向を見たところ/説明坂が見える



ここにも水落遺構・石樋があった



水路遺構

高知は、雨の多い土地柄であり、高知城には排水のための様々な工夫が見られる。この水路遺構は、三ノ丸に降った雨水を集めて2ヶ所の石樋から排水することにより、石垣内部に泥水が入り目詰まりによるゆるみが生じないように設けられたものと考えられる。水路は、側板、蓋石で構成されており、主に砂岩が使用されている。底部は、三和土(タタキ)で塗り込められている。

蓋石を外せば、清掃が容易にできる構造となっており、土砂の流入を防ぎつつ、維持管理を可能なものとしている。大雨が降った際には、石樋の先端から水が放出されたものと考えられる。石樋先端部は、折れており側板も一部欠損している。石樋部の底石には、側板を立てるための加工が施されている。

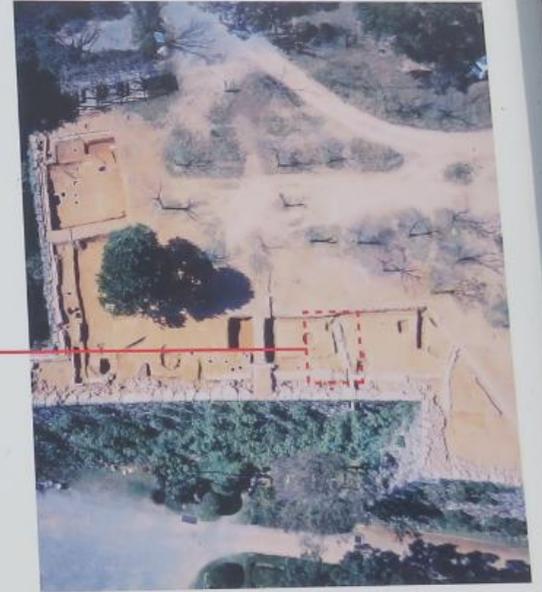


水路遺構の内部構造
(上蓋除去後)

今回は確認された遺構のうち、東面の石樋に接続する部分を復元し、その水を排出するための機能を解りやすく展示することとした。



暗渠水路遺構検出状況



三ノ丸平面調査区航空写真

こんな塩梅



横から見たところ



先端はこんな塩梅



アップで見たところ



その脇に長宗我部期の石垣遺構があった



長宗我部期石垣

高知城のある大高坂山は、南北朝時代の高坂松丸など古くから軍事拠点として利用されていた。戦国末期、四国の覇者となった長宗我部元親は、岡豊城から、天正16年(1588)大高坂山に移り築城したが、水害などにより城下町形成が十分できなかったこともあり、天正19年(1591)に土佐湾に面した浦戸城に移転したという。

この石垣は、三ノ丸石垣改修工事の事前調査として、平成12年8月から実施した石垣背後の発掘調査により確認された。その盛土から中世の遺物以外のものが出土していないため、長宗我部元親が築城した際に構築されたものと考えられる。また、豊臣家から拝領したものと推定される桐紋瓦も盛土の中から出土している。これは、瓦葺きの建物があったことを示すとともに豊臣家との結びつきを示す資料である。

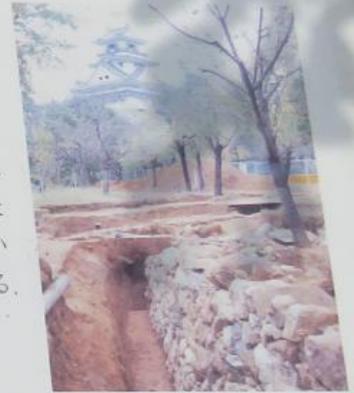


桐紋瓦イラスト



高知県で初めて出土した桐紋瓦

石垣は、延長約13メートル、高さ2.7メートルあり、現在の三ノ丸のすぐ下に埋まっていた。使用されている石材は、主にチャートであるが、一部に石灰岩や砂岩も使用されている。石の大きさは、山内氏が構築した三ノ丸石垣の石材と比べると全般的に小ぶりである。長宗我部氏は、浦戸城や中村城でも石垣を築いており、高知城の石垣は、技術的に成熟する過程にあるものと考えられる。



長宗我部期石垣と高知城天守



小ぶりの自然石を利用して積み上げられている

慶長6年(1601)に長宗我部氏に代わり、山内一豊が土佐に入国し、時を置かず高知城の築城に取りかかっている。三ノ丸は、慶長10年(1611)に完成した。その工事の時に長宗我部時代の建物は壊され、石垣の前面に盛土がなされ、曲輪が拡張され現在の形となったものと考えられる。

こんな塩梅







さて、次は杉の段から鉄門跡→二の丸→詰門へと進んでみよう



杉の段から本丸の天守を見たところ/この先すぐを左手に進むと鐘撞堂跡及び太鼓丸へと至るようだ



少し進むと井戸跡(右手下)があり、左手に説明坂がある



杉ノ段

杉ノ段

かつて杉の巨木がたくさんあったのでこの名がある。北の部分には造幣部屋があり、また長岡から求めてきた船乗品を入れる長柄箱があった。

二ノ丸へ上る道の南側に残る井戸は、深さ約18メートルあり、記録にある城内14の井戸のうちで最も水質が良かったので、毎日午前10時・正午・午後4時の3回この井戸水を汲み、藩主の住む二ノ丸御殿に運んだという。この段を北に出た部分には番付書類などを保管する証文箱が置かれて建てられており、南には雑糧堂などのある太鼓丸があった。城内の林にはたぬき・うさぎ・いのしし・あなぐまなどの動物がいたと記録されている。

杉ノ段には国学者で『万葉集古義』を著わした巖村維孝(1791～1858)の愛妾の碑、高知県の水力発電に防績のあった清水源井(1860～1924)記念碑、明治初期の医師であった星野秀太郎(1859～88)・榎正興(1829～87)・岡村景楼(1835～1890)の記念碑、浜田波静(1870～1923)の句碑、山内一豊の妻の銅像などがある。

Suginodan (Cedar Terrace)

This area was named Suginodan, of cedar terrace, because there used to be many cedar trees here. In the northern area, there was a lacquerer's room and also Nagasakiguro, a storage room in which stockpiled imported goods purchased in Nagasaki were stockpiled. To the north, there was another storage room, Shōmōgura, where important documents were kept. To the south, there was another citadel, Takemaru, on which a belfry was built.

On record, there were 14 wells in the castle. One remains here on the way up to the second citadel, which is 18m deep but is dry now. Because it produced the best quality water, it was drawn three times a day, at 10 a.m., noon and 4 p.m. and carried up to the lord's residence on the second citadel. It was recorded that animals such as raccoon dogs, rabbits, wild boars and badgers inhabited the castle groves.

On this terrace, there are various monuments, one of which is for the beloved wife of Kamochi Masamune (1791-1858), a scholar of national learning, who wrote Manyōshū Kagū, a study on the Anthology of Myriad Leaves. Other memorial monuments are for Shimizu Gensei (1860-1924) who contributed to the development of hydroelectric power in Kochi, and for three medical doctors namely Hoshino Shūtarō (1859-88), Kusunoki Masaoki (1829-87) and Okamura Keirō (1835-90). On a stone slab, a haiku by Himada Hasei (1870-1923) is inscribed. There is also a bronze statue of Yamauchi Katsutosyo's wife.

杉之段

曾經所有很多巨大的杉樹，故而得名。南北是兩重城的間，還有兩重城內以長柄箱裝載的船乘品貯藏處。在造幣部屋或保單部一口水井。北方所處的證文部屋，所以這口水井的水質是最好。藩主住的二丸御殿南面的就是這口水井。

杉나무 단 (杉の段)

이전에 거대한 참나무가 많이 있었던 곳에서 이름이 붙었다. 이 명칭에는 칠공룡의 직장과 방화물품 등이 놓여 있던 곳이었다. 길 옆에 남아 있는 우물은 성 안의 우물 중에서 가장 낮은 장소에 있었기 때문에 가장 수질이 좋고 채수 배로시에게 큰 인기를 끈다. 다이묘의 후궁 가 사는 시노미우 여관 (御殿)에서 사용되었다.

일상 여기저기에 몇 개의 기념비가 있으며, 또한 이 일출지는 이마무치 카즈요의 무인화 동상이 있다.



杉ノ段

かつて杉の巨木がたくさんあったのでこの名がある。北の部分には塗師部屋があり、また長崎から求めてきた舶来品を入れる長崎蔵があった。

二ノ丸へ上る道の南側に残る井戸は、深さ約18メートルあり、記録にある城内14の井戸のうちで最も水質が良かったので、毎日午前10時・正午・午後4時の3回この井戸水を汲み、藩主の住む二ノ丸御殿に運んだという。この段を北に回った部分には重要書類などを保管する証文蔵が離れて建てられており、南には鐘撞堂などのある太鼓丸があった。城内の林にはたぬき・うさぎ・いのしし・あなぐまなどの動物がいたと記録されている。

杉ノ段には国学者で『万葉集古義』を著わした鹿持雅澄^{かもち まさすみ} (1791～1858)の愛妻の碑、高知県の水力発電に功績のあった清水源井^{しみず げんせい} (1860～1924) 記念碑、明治初期の医師であった星野秀太郎 (1859～88)・楠^{くすのき} 正興^{まさおき} (1829～87)・岡村景楼^{けいろう} (1835～1890)の記念碑、浜田波静^{はせい} (1870～1923)の句碑、山内一豊の妻の銅像などがある。

星野秀太郎の記念碑



楠正興の記念碑



岡村景楼の記念碑



右手に登って行くと鉄門跡がある



これは左手に行く道/ここを進むと高知県庁になっている下屋敷跡へと至るようだ



右手の階段を登る



ここが鉄門跡/鉄門付近の石垣は、鉄門の改築に伴い積み直されたものと見られ、砂岩で構成された打込ハギの石垣となっている



柵形となっている/説明板がある



鉄門跡

この場所には左右の高い石垣をまたいで入母屋造り二階建ての門が設けられていた。ここを入ると二ノ丸から本丸に通じる重要な位置にあるため石垣は整然と築かれていて、門の扉には多くの鉄板が全体に打ち付けられていたので、鉄門と称された。

小さな枡形を形作っている門の内側には番所があって、弓・鉄砲を持った番人と足輕が詰めていた。

右と正面の石垣の上には矢狭間塀がめぐらされていて、門内に侵入した敵を3方面から攻撃できるようになっていた。左に曲がって石段を上がると、矢狭間塀のために二ノ丸方面への道は見え、むしろ詰門への石段が連続して見えるので、自然と詰門の方向に導かれるように巧妙に設計されていた。石段は18段あって「一八雁木」と呼ばれていたが、現在は16段になっている。石段の中間から鉄門の二階に上がるように設計されており、そのあたりの石には切り出した時の楔の跡がそのまま残っているものがみられる。

Tetsumon (Site of the Iron Gate)

There used to be a two-storey gate with half-hipped gables here, connecting the tall ramparts on the right and left. This was an important defensive gate, leading up to the second citadel from where the main citadel was reached. The gate had iron, *tetsu*, plated doors and so was called the Iron Gate, *Tetsumon*. The ground inside the gate was built as a box-shaped defence, or *masugata*. Here, armed guards and foot soldiers, or *ashigaru*, were stationed in a hut.

Upon the ramparts on the right and front, there used to be defensive walls with portholes, *yazamabei*, to attack invaders from three different directions. The castle was constructed in such a deceptive way that while turning to the left to go up the flight of stone stairs, the way to the second citadel was hidden behind the *yazamabei*. Thus, the invaders would naturally proceed in the direction of the Guardroom Gate (or Trick Gate), *Tsumemon*. The stone steps originally had 18 steps and so were called *Jūhachigangi*, however, now there are only 16 steps. Halfway up *Jūhachigangi*, on the left hand rampart, another flight of steps can be seen. This was to access the second floor of *Tetsumon*. There still remain marks on some of the stones here from when they were quarried.

铁门遗迹

在这里设有超过高高石垣的两层建筑的 门。因为一旦进入这儿就是从二丸通往本丸的重要位置 所以石垣被修筑的井然有序。门上也被许多铁板钉满了 所以称为铁门。另人称奇的精妙设计是、一旦踏上石阶、就会很自然的被吸引到与通往二丸的要道相反的路上去、这使得进入铁门的敌人受到三面夹击。

구로가네 문 터

이 장소에는 좌우의 높은 석벽을 걸쳐고 이층짜리 문이 있었다. 이 곳은 성의 중심부로 통하는 중요한 위치이기 때문에 석벽은 정연하게 쌓여져 있고 문짝 전체에는 많은 철판(구로가네)이 붙어 있어 구로가네문이라 불리게 되었다.

문 안으로 진입한 적을 세 방면에서 공격할 수 있게 되어 있고, 돌계단을 오르면 성의 중심부로 가는 길과는 다른 방향으로 자연스럽게 향하도록 교묘하게 설계되어 있다.



19 年度解体調査より

- 修築前の鉄門 -



三ノ丸の石垣は慶長 16 年（1611）に完成しています。正保年間（1644～46）に描かれた高知城の古絵図にも石垣の絵が見られます。修築前の鉄門の石垣は、三ノ丸の他の石垣と様相が異なり、いつ頃積まれたものかわかっていませんでした。

修築前の鉄門



石垣の裏側から 18 世紀後半頃の肥前産陶磁器の欠片が出土し、文献資料にみられる宝暦 3 年（1753）三ノ丸再建の頃に改修されたものと思われる。



外面露文、内面露文の文様が描かれています

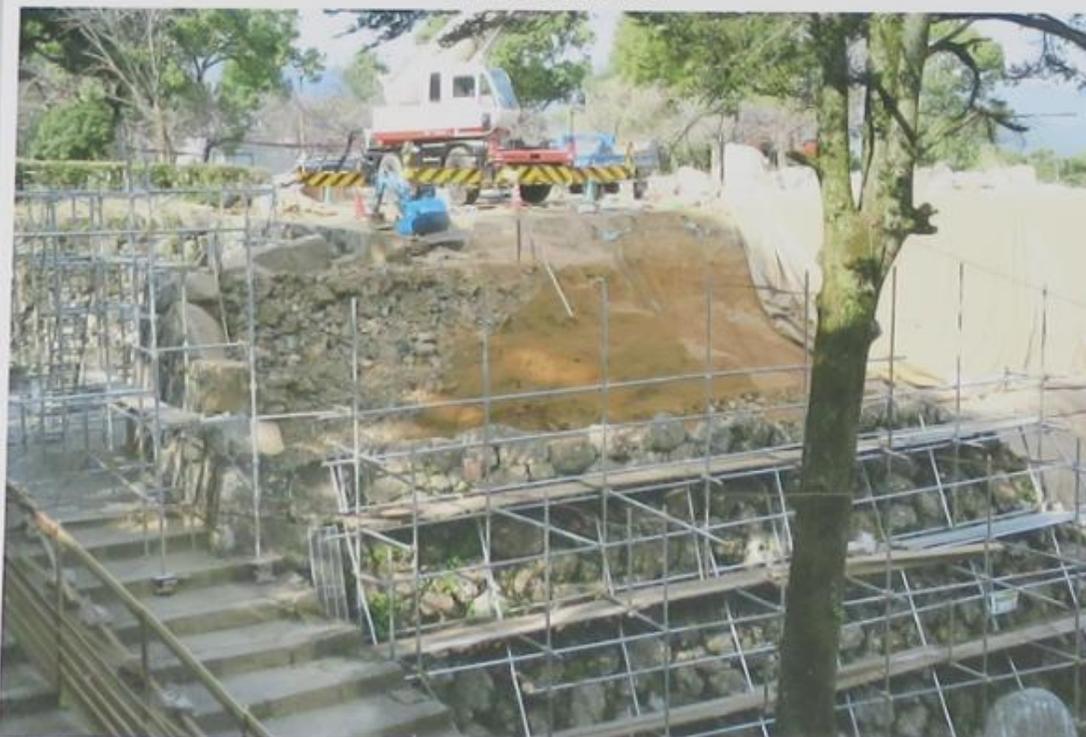
打込みハギ

鉄門は打込みハギという技法で積まれています。打込みハギとは矢を使って割った割石を積み、その隙間に間石を詰める積み方です。





鉄門の裏側の様子



鉄門の裏込め石

鉄門の裏側は、グリ石が使われています。グリ石は大小様々な大きさの石が使用されており、排水機能の工夫がされています。手前は石を加工する際にできる剥片等の比較的小さな石、奥の方は大きな石を詰めることによって雨水を浄化して排水する役割を果たしています。

19年度解体調査より

—鉄門の根石—

今回の石垣修築にあたり、石垣の基礎である根石の確認調査を行いました。
その結果、鉄門の石垣に使われている砂岩の築石とは異なるチャートの根石が確認されました。
この根石は、三ノ丸が完成した慶長16年(1611)年、二代藩主山内忠義の段階のものと考えられ、正保年間(1644~46)に描かれた古絵図にみられる鉄門の石垣に使われていたものと思われます。



TR3

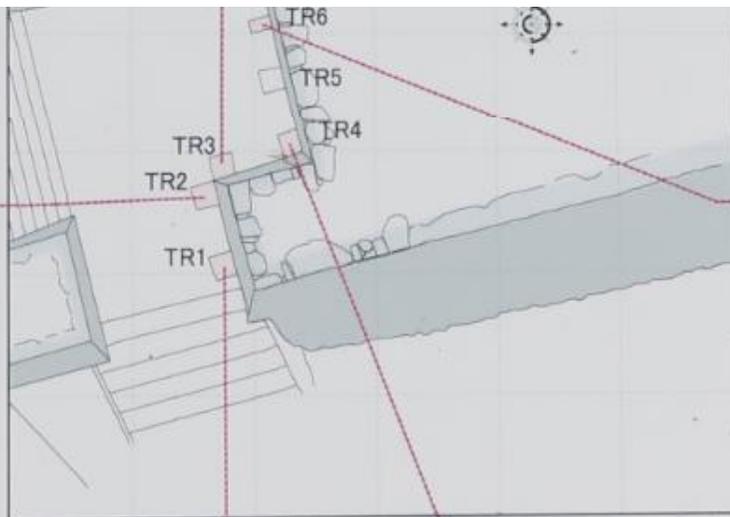


TR7





TR2



根石確認調査箇所(TRは試掘トレンチの略号)



TR6



TR1



TR4

根石は一辺が1m前後あり、地山の上に置かれています。石面(表面)の勾配が現況の鉄門石垣と比べ緩いことから、旧鉄門石垣の幅の規格は今より広かったことが推測できます。

TR1～3で確認された根石は表面が鑿で加工されています。

享保12年(1727)に高知城は大火により火災を受けますが、三ノ丸も焼失してしまいます。三ノ丸は宝暦3年(1753)に再建されますが、修築前の現況の鉄門はこの時に改修されたものと思われます。

左手に折れると正面に詰門が見える/石段の中間左手から鉄門の二階に上がれるように設計されており、その辺りの石には、切り出した時の楔の跡がそのまま残っているものが見られると云う/少し先の踊り場で右手に折れると先程の三の丸へ至る



階段から振り返って枳形を見たところ



踊り場で左手を見たところ/ここは犬走りと呼ばれ、先に進むとやはり高知県庁になっている下屋敷跡へと至るようだ



右手を見るとここが三の丸の入口で、正面に三の丸から二の丸へ登る階段がある/右手に回り込むと三の丸



二の丸へと階段を登ろう



左手に折れて登ると二の丸に至る/右手がスキヤ櫓跡と水の手門跡の辺り



ここが二ノ丸/ここには目付役所やスキヤ櫓、家具櫓、長局などの建物があったと云う/特に西北隅にあった二ノ丸乾櫓は、城内にあった8棟の櫓の内では唯一3階建てで、2階と3階の屋根には飾りの千鳥破風を配し、さながら小天守のようであった/北側の一段下がった所に水の手門があり、綿蔵・綿蔵門を経て城八幡方面や北門の方に通じていた/東側から西方向を見たところ



ここに表御殿と奥御殿が連続して建てられていた



ニノ丸



ニノ丸

本丸の北、三ノ丸の西上方に位置するこのニノ丸は、二ノ丸より約8メートル高く、標高約40メートル、外輪の長さ270メートル、総面積4,128平方メートルの台地である。ここに建てられていたニノ丸御殿は、政務をとる表御殿と藩主が日常の生活をする奥御殿が連続して建てられており、一部二階建てになっていた。総面積は1,233平方メートルもあった。明治6年(1873)公園化にともなうすべての建物が撤去されたが、現在残る築山は、奥御殿の上段の間に藩主が着座したとき、正面に見える位置にあっている。

二ノ丸にはこのほか目付役所やスキヤ櫓、家具櫓、長尾などの建物があつた。特に西北隅にあつた二ノ丸乾櫓は、城内にあつた8棟の櫓の内では唯一三階建てで、二階と三階の屋根には飾りの千鳥破風を配し、さながら小天守のようであつた。

北側の一段下がったところに水の手門があり、籠籠・緒籠門を経て城八幡方面や北門の方に通じていた。

Ninomaru (Second Citadel)

To the north of the main citadel, 8m above the west side of the third citadel, is the second citadel, Ninomaru. It is a small plateau 40m above sea level, 270m in circumference and 4,128m² in area. There used to be a large building here, of which the front part, Omotogoten, was the lord's living quarters. It was a one-storey building, except in one place which was two-storeyed. The site was 1,233m² in area.

In 1873, when the castle was opened as a park, all the buildings were demolished. However, a Japanese garden, tsuAiyama, remains. The view of the garden could be enjoyed from the lord's dais room, jōdannonoma, of Okugoten. There were also other buildings such as security offices, houses for court ladies and so on. Among the 8 turrets which existed in the castle, only *hiwari* turret on this citadel, built at the northwest corner, was three-storeyed. The roofs of its second and third floors were decorated with dormer gables and looked like a small version of the castle keep.

二ノ丸

在这儿建的二ノ丸御殿 是由处理政务的表御殿及藩主日常生活的内御殿所构成。其中有一部分是两层的建筑。总面積約有1,233平方米。此外，还有备种新楼及宫女们住的房舍。
随着1873年开办的公园化运动 这儿的建筑被尽数拆毁。现在保留下来的筑山 就位于藩主当年坐在内御殿、正前方的位置上。

二ノ丸

この二ノ丸御殿は、政務をとる表御殿と藩主が日常の生活をする奥御殿が連続して建てられており、一部二階建てになっていた。総面積は1,233平方メートルもあった。明治6年(1873)公園化にともなうすべての建物が撤去されたが、現在残る築山は、奥御殿の上段の間に藩主が着座したとき、正面に見える位置にあっている。



西側から東方向に見たところ/右手に説明坂が立っている



二の丸の築山と池

(Second Citadel miniature mountain)

二ノ丸は、藩主が政務を行う場所であると同時に奥御殿が設けられるなど生活の場でもあった。二ノ丸南西部に位置する築山と池は、庭園が無い二ノ丸の中にあって風雅を楽しむ数少ない場所である。

明治初年頃の様子を伝える「高知城の図」にも築山が、国主居間の前に描かれており、歴代藩主も居間から築山越しに本丸の建物や高知市南部の峰々を眺めていたものと想像される。



これが二の丸の築山と池/前方に天守が見える



振り返って西方向を見ると、西側に下って行く虎口と二の丸乾槽跡(右手)が見える



ここが二の丸乾櫓跡



さて、本丸方向を見ると天守の手前に詰門がある



そこで右手を見ると本丸の石垣が見える



これが詰門/本丸と二の丸の間の堀切に設けられた櫓門/高知城懐徳館入口と記された看板が掲げられている



詰門 (つめもん)

(Tsume-mon Tsumemon Gate)

構造形式 檜門 北面入母屋造 二階建
南面廊下門に接続 本瓦葺
建築年代 享和 2(1802) 年

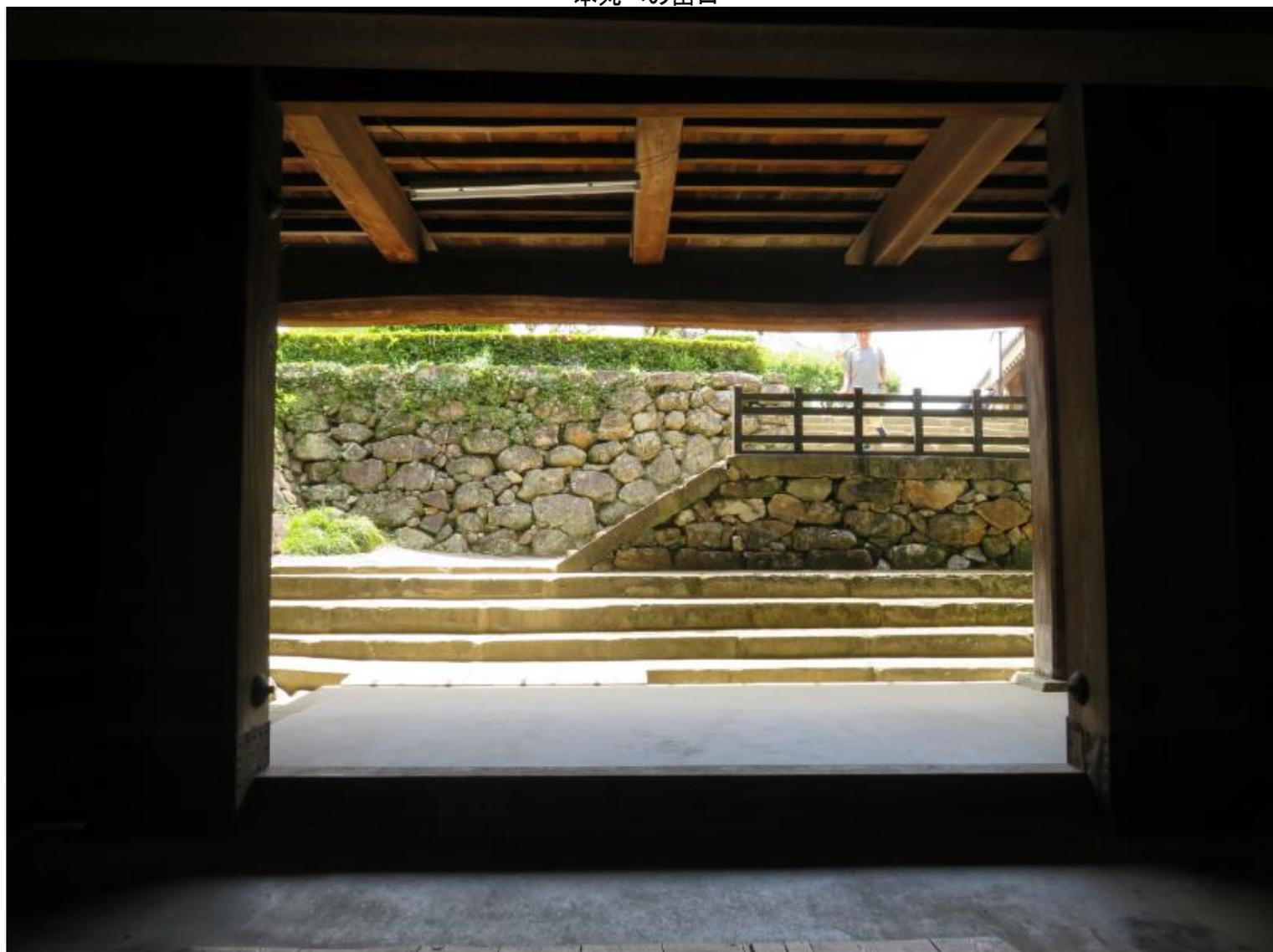
詰門は、本丸と二ノ丸の間の堀切に設けられた檜門である。廊下橋としての役割も担っており、二階部分は、藩主のもとに向かう家老の待合場所であったことから、詰門の名が付けられたと言われている。

一階部分は、籠城に備え、塩を蓄える蔵になっている。入口は、東面と西面で食い違いになっており、攻め寄せた敵が容易に突破できない構造となっている。

入口を入ると詰門の二階で、橋廊下と呼ばれる/板の間の東南隅には非常の場合の階下への抜道が設けられている/東面に3ヶ所、西面に5ヶ所の隠し銃眼(狭間)も設けられている



本丸への出口



こな塩梅



右手に階段を登ると本丸/前方は西多間



さて、ここで詰門の正面を見てみよう/鉄門跡から階段を登り切ると詰門正面となる/二階の部分が二の丸(右手)と本丸(左手)を繋ぐ橋廊下/一階は東(手前)の出入口が右寄りに、西(背後)の出入口は中央に付けられていて、筋違いになっている



詰門

詰門

詰門は本丸と二ノ丸の間に設けられた空堀をまたぐかたちで建てられており、橋脚下という旧名がある。階上が登城した武士の詰所となっていたため、現在は詰門と称している。東の出入り口は右寄りに設け、西の出入り口は中央につけられていて、防衛力になっている。これは攻め上ってきた敵が容易に通り抜けられないようにという防衛上の配慮によるものである。また、東からこの門を突破しても容易に本丸には行けないようになっている。

一階部分の右寄りには部将のための室を貯蔵するようになっている。中二階部分は窓もなく物置であったと考えられる。二階は二ノ丸から本丸への通路でもあり、内部の3室を置敷きとし、家老・中老・平侍と身分に応じて結める場所が定められていた。板の間の東廊側には非常の場合の階下への抜道が設けられている。また、東面に3カ所、西面に5カ所の隠し銃眼(狭間)も設けられている。

Tsumemon (Guardroom Gate, or Trick Gate)

Tsumemon was built over a warless moat connecting the main and the second citadel. It used to be called a bridge highway but is now called Guardroom Gate, Tsumemon, because there were guardrooms on the upper floor.

The entrance and the exit of the gate were located diagonally to each other. Taking into consideration the defence of the main citadel, the gate was constructed so as to keep the advancement of enemies in check. Even if the enemies succeeded in breaking through the gate, they would emerge in a square still outside the main citadel. Hence, its nickname, "Trick Gate".

Salt was kept in the southern part of the first floor in case of siege. In between the first and the second floors is a windowless floor, which was probably used for storage. On the second floor, there were three tatami rooms used as a hallway leading from the second citadel to the main citadel. Chief, deputy, and common retainers kept guard in their respective guardrooms. At the southeast corner of the wooden-floored room, a trapdoor was constructed, hiding a gutter which leads to the first floor. There are three hidden portholes on the east side and another five on the west.

詰門

詰門は本丸と二ノ丸の間に設けられた空堀をまたぐかたちで建てられており、橋脚下という旧名がある。階上が登城した武士の詰所となっていたため、現在は詰門と称している。東の出入り口は右寄りに設け、西の出入り口は中央につけられていて、防衛力になっている。これは攻め上ってきた敵が容易に通り抜けられないようにという防衛上の配慮によるものである。また、東からこの門を突破しても容易に本丸には行けないようになっている。

詰門

詰門は本丸と二ノ丸の間に設けられた空堀をまたぐかたちで建てられており、橋脚下という旧名がある。階上が登城した武士の詰所となっていたため、現在は詰門と称している。東の出入り口は右寄りに設け、西の出入り口は中央につけられていて、防衛力になっている。これは攻め上ってきた敵が容易に通り抜けられないようにという防衛上の配慮によるものである。また、東からこの門を突破しても容易に本丸には行けないようになっている。

詰門は本丸と二ノ丸の間に設けられた空堀をまたぐかたちで建てられており、橋脚下という旧名がある。階上が登城した武士の詰所となっていたため、現在は詰門と称している。東の出入り口は右寄りに設け、西の出入り口は中央につけられていて、防衛力になっている。これは攻め上ってきた敵が容易に通り抜けられないようにという防衛上の配慮によるものである。また、東からこの門を突破しても容易に本丸には行けないようになっている。



詰門の平面図
一階
二階

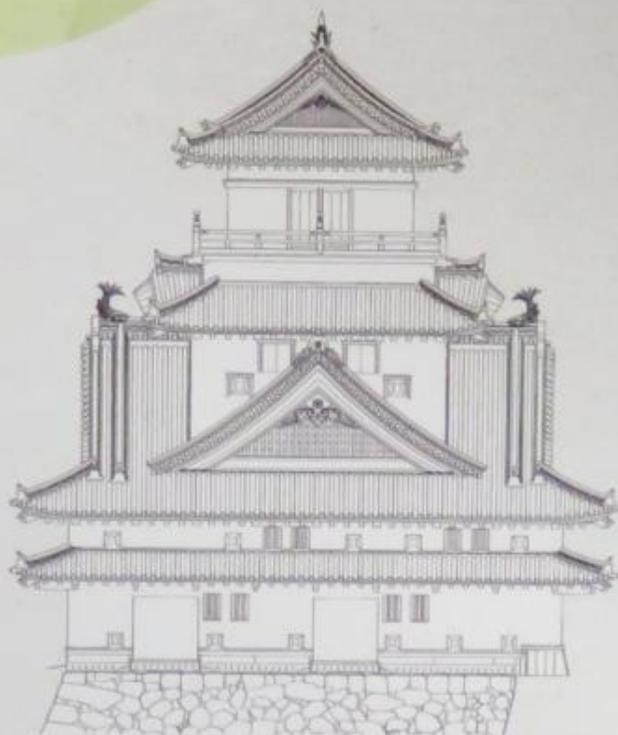
詰 門

詰門は本丸と二ノ丸の間に設けられた空堀をまたぐかたちで建てられており、橋廊下という旧名がある。階上が登城した武士の詰所となっていたため、現在は詰門と称している。東の出入り口は右寄りに設け、西の出入り口は中央につけられていて、筋違いになっている。これは攻め上ってきた敵が容易に通り返けられないようにという防衛上の配慮によるものである。また、東からこの門を突破しても容易に本丸には行けないようになっている。

一階部分の南寄りには籠城のための塩を貯蔵するようになっていた。中二階部分は窓もなく物置であったと考えられる。二階は二ノ丸から本丸への通路でもあり、内部の3室を畳敷きとし、家老・中老・平侍と身分に応じて詰める場所が定められていた。板の間の東南隅には非常の場合の階下への抜道が設けられている。また、東面に3カ所、西面に5カ所の隠し銃眼(狭間)も設けられている。

そこで左手を見ると天守が見える





天守の型式には、入母屋屋根の上に望楼を載せた望楼型
天守と五重塔の様な外観を持つ層塔型天守に分類される。
望楼型天守は、初期天守に見られる形態で次第に層塔型
天守に発展していく。高知城は、望楼型天守であり、北
面を見るとその古風なたたずまいが感じられる。

アップで見たところ



石垣の上には「石落とし」と「忍び返し」が見える



こんな塩梅



そこから詰門方向を見たところ



同じく左手(南方向)を見たところ/こちらに進むと鐘撞堂、太鼓櫓跡がある



北東方向を見ると鉄門跡と三の丸が見える



その右下は杉の段方面



南方向に進み、平場で振り返って鐘撞堂を見たところ/左手が本丸



左手の本丸の石垣を見たところ



「石落し」がある



石樋や様々な形を持つ矢狭間がある



平場の左手(南側)から本丸へ進む道がある



その左手を見たところ/この辺りが太鼓櫓跡か/ここを下って行くと高知県庁になっている下屋敷跡へと至ようだ



本丸へと進むと本丸搦手門の黒鉄門がある



黒鉄門

(Kurogane-mon Black Iron Gate)

構造形式 檜門 入母屋造 一階建 本瓦葺

建築年代 享保 15(1730) 年

本丸南側を固める門。守りを堅固にするため、扉の外側には、黒漆で塗られた鉄板が打ち付けられている。この様子から、黒鉄門と名付けられたものと考えられている。

二階部分は、武者が隠れることが出来る様になっており、門の外側に石落としが設けられるなど防御性の高い門となっている。

本丸内に入って振り返って見たところ



正面は二の丸から本丸への詰門の橋廊下出口の上に架かる廊下門



左手は西多聞/説明坂が立っている





西多聞(にしたもん)
(Nishi-tamon West Tamon Building)

構造形式 一重檜 本瓦葺

建築年代 江戸時代中期

本丸を囲む檜の一つ。

多間檜は、長屋状の建物のこと。

本丸の西側の守りを両側に延びる矢狭間塀とともに担っている。内部は、二部屋に別れている。外壁は、分厚い漆喰で塗籠られており、火災から守ると同時に風雨に備えたものとなっている。

右手に天守が見える/説明坂がある



天守

本丸・天守閣

本丸は標高44.4メートル、変形の土地で敷面積は約1,580平方メートルある。その中に天守閣をはじめとして本丸御殿・東西多門櫓・御下門・薬師門・納戸建などが配置され、外周りは鉄砲のついた矢掛間などでつなれている。本丸のすべての建築物が完全な形で残されているのは全国12の城郭の中でも高知城だけで、たいへん貴重な遺構である。本丸の建物は慶長6年(1601)創建、享保12年(1727)火災のため全焼、寛延2年(1749)前後の再建であるが、創建当時の規模をそのまま残している。天守閣の高さは18.5メートル。他の城郭に見られる天守台はなく、北側の石垣から直接建ち上げる形にしており、入り口は御殿に接している。建坪は168.18平方メートル、延べ面積499.84平方メートルで、外観は四層であるが、内部は三層で六層になっている。最上層外側の四面には高欄のついた回り縁をめぐらし、外に出て展望することができるようになっている。

二階大屋根と最上層にそれぞれ銅製の鯱を置き、大屋根の南北に千鳥破風、第三層の寄棟部分は東西に唐破風を置くなど、外観を美しく見せる工夫が各所に施されている。力強い軒先の反りも見事で、小規模ながら南海道随一の名城といわれた面影を今に残している。

Homaru(Main Citadel)/Tenshukaku(Castle Keep)

Homaru is 44.4m above sea level and is 1,580 m² in area. Kochi Castle is the only castle in Japan in which all the Homaru buildings have been kept in perfect condition. Therefore, the castle is historically valuable. The buildings of the castle are called Tenshukaku, Homaruogoten, Kondogoten, Tonji, Jimon, Yagura, Rokumawari and Kusurimawari. The periphery of the buildings are surrounded by kasumabari wall with 1,580 holes for shooting. The construction of the buildings was started in 1601 and completed in 1603. However, all of them were destroyed by a big fire in 1727. Around 1749, these buildings were reconstructed. Homaru is the same size now as when it was first built.

Tenshukaku, the castle keep, is 18.5m in height. The keep does not stand on *tenshudai*, stone foundations, like in other castles, but is built along the northern side of the stone ramparts. The entrance is adjacent to *Momuroogoten*, the guardhouse. It is built on a plot measuring 168.18 m², and has a total floor space of 499.84 m². The building appears to be four-storied, but in reality it is made up of three layers containing six floors. Outer walkways with handrails enclose the top floor, and command extensive views of Kochi city.

There are various architectural devices that beautify the external appearance. Copper *shachū*, imaginary fish-like creatures, decorate each end of the ridges on the second and the top roofs. *Chōbonhaifu*, domer gables, have been attached to the northern and southern slopes of the second roof. *Karahaifu*, undulating gables, have also been attached to the east and west sides of the third hipped roof up. All the eaves reach up majestically into the sky.

Kochi Castle was considered to be the most outstanding castle in the *Nankaidō* region despite its small dimensions.

Now the prefectures of Ehime, Kagawa, Kochi, Tokushima, Wakayama, and Awajishima island

本丸・天守閣

本丸の高標高44.4米、変形の土地に敷面積は約1,580平方メートルある。その中に天守閣をはじめとして本丸御殿・東西多門櫓・御下門・薬師門・納戸建などが配置され、外周りは鉄砲のついた矢掛間などでつなげられている。本丸のすべての建築物が完全な形で残されているのは全国12の城郭の中でも高知城だけで、たいへん貴重な遺構である。本丸の建物は慶長6年(1601)創建、享保12年(1727)火災のため全焼、寛延2年(1749)前後の再建であるが、創建当時の規模をそのまま残している。天守閣の高さは18.5メートル。他の城郭に見られる天守台はなく、北側の石垣から直接建ち上げる形にしており、入り口は御殿に接している。建坪は168.18平方メートル、延べ面積499.84平方メートルで、外観は四層であるが、内部は三層で六層になっている。最上層外側の四面には高欄のついた回り縁をめぐらし、外に出て展望することができるようになっている。

本丸・天守閣

本丸は標高44.4メートル、変形の土地に敷面積は約1,580平方メートルある。その中に天守閣をはじめとして本丸御殿・東西多門櫓・御下門・薬師門・納戸建などが配置され、外周りは鉄砲のついた矢掛間などでつなげられている。本丸のすべての建築物が完全な形で残されているのは全国12の城郭の中でも高知城だけで、たいへん貴重な遺構である。本丸の建物は慶長6年(1601)創建、享保12年(1727)火災のため全焼、寛延2年(1749)前後の再建であるが、創建当時の規模をそのまま残している。天守閣の高さは18.5メートル。他の城郭に見られる天守台はなく、北側の石垣から直接建ち上げる形にしており、入り口は御殿に接している。建坪は168.18平方メートル、延べ面積499.84平方メートルで、外観は四層であるが、内部は三層で六層になっている。最上層外側の四面には高欄のついた回り縁をめぐらし、外に出て展望することができるようになっている。



本丸・天守閣

本丸は標高 44.4 メートル、変形の土地で総面積は約 1,580 平方メートルある。その中に天守閣をはじめとして本丸御殿・東西多門櫓・廊下門・黒鉄門・納戸蔵などが配置され、外回りは銃眼のついた矢狭間でつないでいる。本丸のすべての建造物が完全な形で残されているのは全国 12 の城郭の中でも高知城だけで、たいへん貴重な遺構である。本丸の建物は慶長 6 年（1601）創建、享保 12 年（1727）火災のため全焼、寛延 2 年（1749）前後の再建であるが、創建当時の規模をそのまま残している。天守閣の高さは 18.5 メートル。他の城郭に見られる天守台はなく、北面の石垣から直接建ち上げる形にしており、入り口は御殿に接している。建坪は 168.18 平方メートル、延べ面積 499.84 平方メートルで、外観は四層であるが、内部は三層で六階になっている。最上階外側の四面には高欄のついた回り縁をめぐらし、外に出て展望することができるようになっている。

二階大屋根と最上層にそれぞれ銅製の鯨を置き、大屋根の南北に千鳥破風、第三層の寄棟部分は東西に唐破風を置くなど、外観を美しく見せる工夫が各所に施されている。力強い軒先の反りも見事で、小規模ながら南海道随一の名城といわれた面影を今に残している。

天守は威臨閣、本丸御殿は懐徳館と名付けられ、一般に開放されている



右手を見たところ



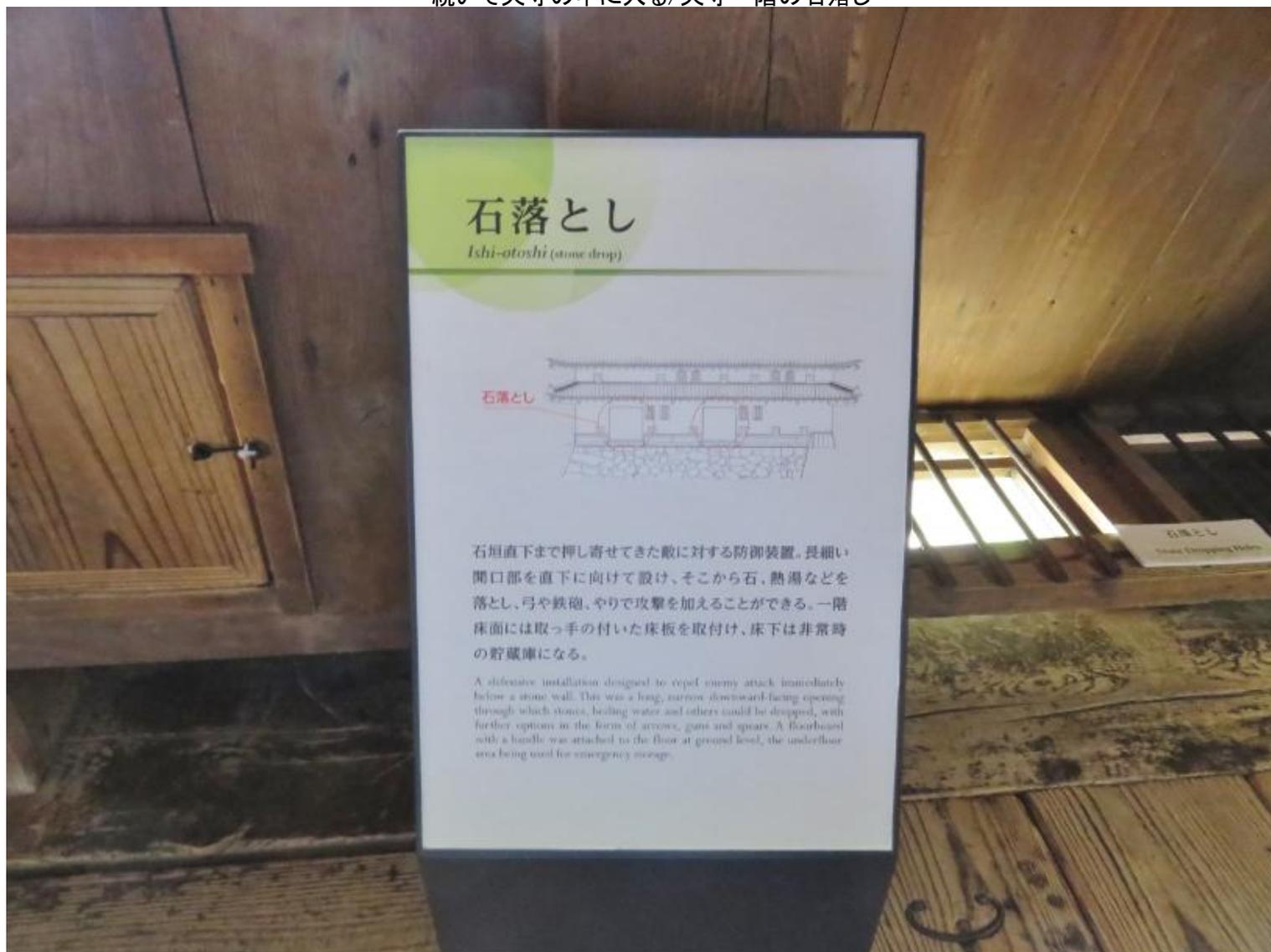
中に入ってみよう



これは本丸御殿野正殿の間から庭園を見たところ



続いて天守の中に入る/天守一階の石落とし



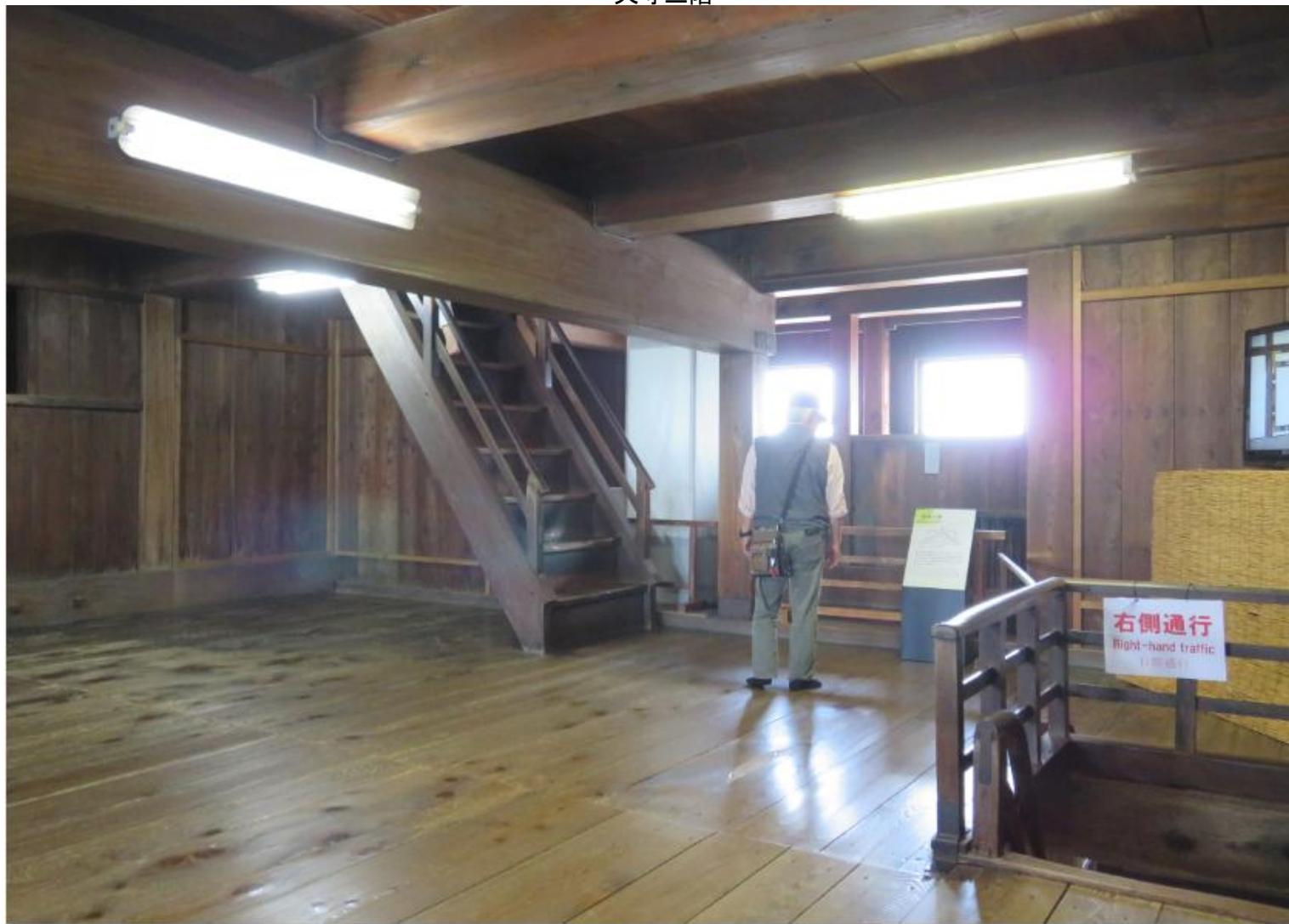
鉄砲狭間と忍び返し



左から見性院(一豊の妻)、山内一豊、山内康豊(一豊の弟)



天守三階



破風の間/破風の内部に部屋を設け、人が入れるようにしたものが、初期の形態で実戦的なものである/高知城の破風の間は石打ち棚と呼ばれ、物見や鉄砲狭間の役割があり、攻撃の為の小陣地になり東西南面に設けられている/北側の破風内部は、隠し部屋となっている

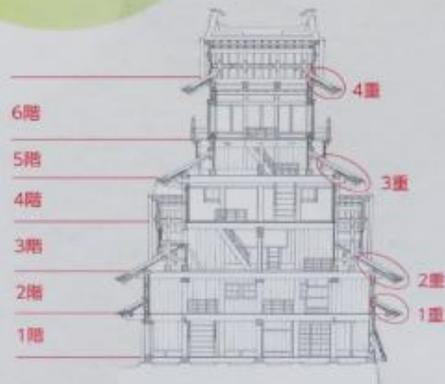


天守四階



天守の「重」と「階」

Tiers and stories of a castle tower



「重」は、屋根の重数を見た外観を表し、「階」は、内部の階層数を示している。高知城は、4重6階(重要文化財指定としては、4重5階)の構造となっている。5階部分は、窓も狭間も無く「小屋の段」と呼ばれ、安土城や豊臣氏の大坂城など古い時代の天守の型式を残していると言われている。

"Tiers" refers to the number of roofs visible from the outside, while "stories" indicates the actual number of floors inside. Kochi Castle has four tiers and six stories. The 5th story is a "penthouse floor" without windows or portholes, and is said to be a survival of an archaic style of castle tower once seen in Azuchi Castle and Toyotomi Hideyoshi's Osaka Castle, among others.

天守六階(最上階)



東方面 EAST

高知駅方面

高知県立大学

岡豊城跡方面
(歴史民俗資料館)

文学館

追手前高等学校

土佐女子中学高等学校

新図書館等総合施設
(オーテピア)

高知市文化プラザ
(かるぼーと)

高知城歴史博物館

五台山・竹林寺・牧野植物園

東方面



その左手/三の丸が見える



同じく右手/左手にある建物は高知城歴史博物館



北方面 NORTH

小津高等学校

高知大学教育学部附属小学校・中学校

高知自動車道

城北中学校

県警本部

丸の内高等学校

平成29(2017)年3月撮影



北方面



その下を見たところ/左手が詰門



その右手/三の丸が見える



同じく左手/右手の二の丸から詰門の橋廊下を通過して廊下門の下から本丸(左手)に入るルートが見て取れる



西方面 WEST

坂本龍馬生誕地

県庁西庁舎

四国森林管理局

裁判所

検察庁

高知市総合あんしんセンター

高知中学高等学校

武道館

西方面/黒鉄門が見える



その左手



同じく右手



南方面
SOUTH

土佐藩主山内家墓所

旧山内家下屋敷長屋

高知市総合運動場

高知市役所

高知県議会

浦戸城跡方面

高知県庁本庁舎

筆山



南方面



その左手



同じく右手



西側大入母屋破風の鯨



ここは天守一階から廊下門へと続く東多聞の展示スペース/長宗我部元親関連の展示で、左手は一領具足



廊下門も展示スペースとなっている



さて、ここが追手門の前にある高知城歴史博物館



その展望室からみた天守



アップで見たところ



最後に追手門の下(南側)から左手(西方向)の下屋敷跡(御屋敷と記されている)へ進んでみよう



これは水堀の南東角に架かる橋/前方は御馬場跡



左手の水堀を見たところ



右手の水堀を見たところ/前方が追手門



高知城跡 御馬場跡 (丸ノ内緑地)

当地は古絵図によると藩政初期には「侍屋敷」と記されていますが、中期には「御馬場」と記録されています。

平成17(2005)年に実施された試掘調査の結果、17世紀前半頃及び19世紀前半頃の、侍屋敷に関すると思われる遺構や、石組みの水路跡等が確認されました。

また現在の堀の内側には土手状の遺構がのこり、かつて幅12間であった内堀の規模をうかがうことができます。



調査地点と遺構検出位置



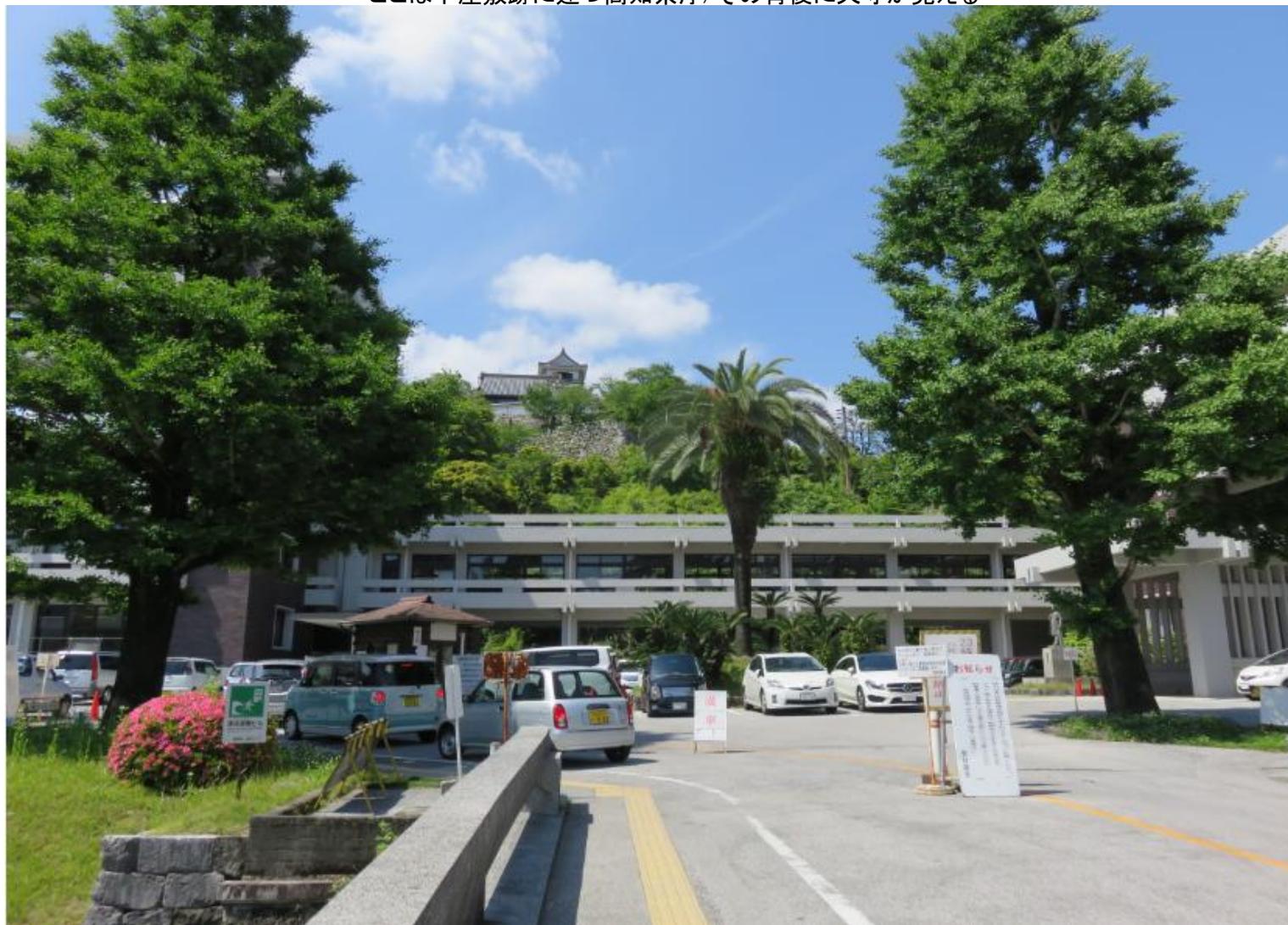
寛文九(1669)年の城下町図にみる当地(「御馬場六十六間」の記事)
『寛文己酉高知絵図』(高知市立市民図書館平尾文庫所蔵)部分



ここが御馬場跡/現在は丸ノ内緑地という公園になっている



ここは下屋敷跡に建つ高知県庁/その背後に天守が見える



アップで見たところ



右手(東方向)を見たところ



左手(西方向)を見たところ



ここは高知城のすぐ南東側にある高知大神宮



社殿



これはその境内に鎮座する「よさこい稲荷神社」





参考ホームページ

<http://yogokun.my.coocan.jp/kouti.htm>

<http://www.uchiyama.info/oriori/shiseki/siro/kochi>

<http://pcpulab.dip.jp/main/kouchijyo.htm>

<https://reki4.com/00352.html>

<https://akiou.wordpress.com/2013/12/20/kouchi/>

<http://www013.upp.so-net.ne.jp/gauss/kouchijo.htm>

